

〔法学新報〕第32卷1(361)号 大正11年1月1日

○都下聯合大雄弁会 去月十一日中央大学辞達学会主催の都下  
 大学及専門学校の聯合大雄弁会は中央大学大講堂に於て開催せ  
 らる辞達学会委員諸氏の努力空しからず聴衆陸続として参集す  
 然れ共学期試験施行中のこととて数校の弁士を迎へ得ざりしは  
 遺憾なりし午後一時二十分委員西村定雄君開会の辞を述べ次て  
 弁士到着順に交々熱と意気ある演説は進行し中央大学理事馬場  
 鏊一博士は花井会長及堀江副会長に代りて登壇せられ現今我國  
 の議場か甚だ陋劣なる弥次の盛なることより論し起され吾人は  
 他人の演説を聴く丈けの雅量肝要なりされと感極りての感嘆の  
 喝采や寸鉄人を刺すの批評は可なりと論し本日は成るべく下劣  
 なる弥次を慎まれたしと希望を述べられて喝采裏に降壇、二時  
 を告ぐる頃は早や満員の盛況を呈し隣の弁士控室にては弁士接  
 待係の委員諸氏類に其接待及進行の準備に忙しさを示す森輝雄  
 君は弁士到着順を書して進行係へ之を報告し十三号室の委員及  
 弁士室と階下の事務室との間には盛に電話か通して鈴の音鳴り  
 響き又受付には横山君三淵君等寒風に吹かれ乍らも粟粟しく応  
 接に忙殺されたり壇上の西村君は弁士及演題の紹介、宮脇君は  
 進行係として机上のラツチと鈴とを見つめ乍ら泰然たり而して  
 弥次の交々起る二時半を過ぐる頃婦人の聴衆若干を見る高橋、

山崎両君等は会場の静肅及整理を努むる為め後方に廻りて活動  
 す斯くして国民新聞編集局長にして学生時局研究会幹事たる馬  
 場恆吾氏出席せられとくに午後四時満場の拍手に迎へられて登  
 壇：華盛頓会議より論し始めて軍備縮少に及び老人專制の政治  
 を打破し青年の活気を喝望す云々と有益にして興味ある講演を  
 試みられ斯くて次より次へとプログラムに依り滞りなく進行し  
 最後に委員砂門善政君の閉会の辞によりて目度<sup>ママ</sup>終了を告ぐ時に  
 五時十五分なり：別室に於て来賓弁士及委員一同記念撮影を為  
 し階下の一室にて一同晚餐を共にしテーブルスピーチに各十二  
 分の歓を尽し各大学弁論部及中央大学の万歳を三唱して楽しく  
 散会したるは午後七時頃なりき因に当日の来賓は馬場憲治博  
 士、馬場鏊一博士、佐藤正之先生、天野徳也先生、馬場恆吾の  
 諸氏にして天野先生は終始能く熱心に本会の為め尽力せられ且  
 晚餐会席上にては委員の請求に応じ極めて有益なる「言靈<sup>コトクマ</sup>と言  
 論の尊重」に付き一場の講話を為されたり因に当日の演題及び  
 氏名は○開会の辞委員西村定雄君○新時代に処する宗教の使命  
 —立大堀江直枝君○生活問題の前途—専大川崎九市君○挨拶—  
 法学博士馬場先生○欧米間に於ける政治的協定の不可能を論す  
 —法大和田良造君○現代思潮に就て外語末政廣治君○荒ひ行く  
 民権—中大佐藤又造君○燃ゆる想を—日大立見貫衆君○現代法  
 律の哲学的考察—高師中村權次郎君○議會制度価値軽減の理—  
 慶大細越政夫君○華盛頓會議人類の解放—慶大岸君○ひつくり  
 かへした煮え湯—東洋木村榮峯君○仏耶兩教の救済觀—曹大  
 坪碧堂君○老閥打破—国民新聞記者馬場恆吾氏○若き勢力の進

行を正視して―早大吉田實君○かすかなる哉平和の曙光―明大  
藤崎清君○天賦人權に就て―中大宮脇信介君○閉会の辞―砂門  
善政君の諸氏にして頗る盛会なりき（委員松尾生記）